新緑の庭

芥川龍之介

桜　さつぱりした雨上りです。尤（もつと）も花の萼（がく）は赤いなりについてゐますが。

椎　わたしもそろそろ芽をほごしませう。このちよいと鼠がかつた芽をね。

竹　わたしは未だに黄疸（わうだん）ですよ。…………

芭蕉　おつと、この緑のランプの火屋（ほや）を風に吹き折られる所だつた。

梅　何だか寒気がすると思つたら、もう毛虫がたかつてゐるんだよ。

八つ手　痒（かゆ）いなあ、この茶色の産毛（うぶげ）のあるうちは。

百日紅（さるすべり）　何、まだ早うござんさあね。わたしなどは御覧の通り枯枝ばかりさ。

霧島躑躅（つつじ）　常――常談云つちやいけない。わたしなどはあんまり忙しいもんだから、今年だけはつい何時にもない薄紫に咲いてしまつた。

覇王樹（サボテン）　どうでも勝手にするが好いや。おれの知ったことぢやなし。

石榴（ざくろ）　ちよいと枝一面に蚤のたかつたやうでせう。

苔　起きないこと？

石　うんもう少し。

楓　「若楓茶色になるも一盛り」――ほんたうにひと盛りですね。もう今は世間並みに唯水々しい鶸色（ひはいろ）で

す。おや、障子に灯がともりました。

底本：「芥川龍之介全集　第十一巻」岩波書店
１９９６（平成８）年９月９日発行
入力：もりみつじゅんじ
校正：松永正敏
２００２年5月17日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。